

trivia ■皮膚科のトリビア■ 172

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで見聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

犬の散歩とスギ花粉症の関係

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

スギ花粉飛散時期に室内犬を外で散歩させると、被毛に花粉が付着して、室内に持ち込まれることを実証した。付着部位は頭、頸部、背部だけでなく、地表に落下している花粉が付着する足蹠や腹部も多かった。帰宅後のシャンプーを用いたシャワー浴、ドライシャンプー、拭き取り用ウェットシートの使用でいずれも付着花粉は減少し、また静電気防止効果のあるペット用ボディケア用品の使用も有効であった。

「花粉飛散時期の犬の散歩に際しては、帰宅後に体毛や足の裏の花粉を拭き取らないと、室内に花粉を持ち込むことになる。ペットオーナーにはそのように伝えることにした」。

アレルギー性結膜炎の有病率

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

眼科医を対象に、自身とその家族のアレルギー性結膜炎(allergic conjunctivitis：AC)の有病率を調査した。3,004名のうち、ACが48.7%、アレルギー性鼻炎(allergic rhinitis：AR)が36.5%、アトピー性皮膚炎が7.0%、喘息が5.8%であった。ACの患者のうちARを合併する頻度は67.9%、AC単独が32.0%で、ACの中ではスギ、ヒノキの季節性ACが

37.4%、通年性ACが14.0%であった。

「耳鼻咽喉科医とその家族のスギ花粉症有病率の全国調査を見たことがあるが、それと同様のコンセプトで行われた調査。鼻炎よりも結膜炎が多いというのは意外だが、スギ花粉症としての結膜炎有病率は18.2%ということになる」。

鶏卵と交差反応のないウズラ卵のアレルギー

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

20歳代の女性。幼児期から数回、ウズラ卵の摂食後に発熱、咽頭違和感、全身のしびれ、呼吸困難をきたしている。ウズラ卵の白身、黄身でプリックテスト陽性。鶏卵の摂取は問題なく、卵白、卵黄の特異的IgE、プリックテストは陰性。ImmunoCAP[®]ISAC(ファディア社)ではオボムコイド、オバルブミン、コンアルブミン陰性。交差反応性なしと判断した。これまで国内で報告されているウズラ卵のアレルギーは、消化管症状をきたした症例のみであった。

「ちなみに、ImmunoCAP[®]ISACとはバイオチップ技術を用いた特異的IgE抗体の新しい測定方法で、30μlの血清または血漿で、112種のアレルゲンコンポーネントに対する特異的IgE抗体を同時に測定することができるという優れたもの。25,000円でできるらしい。保険収載になるといいのだが」。

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

骨髄移植後の生着症候群

第42回日本小児皮膚科学会学術大会から(平成30年7月14日)

造血細胞移植後、幹細胞が生着する時期に一致して非感染性の発熱、肝障害、浮腫、体液貯留による体重増加、下痢などとともにGVHD(移植片対宿主病)に類似する皮膚病変が生じることがあり、生着症候群と呼ばれている。皮膚病変の病理組織は真皮上層の浮腫が主体で、拡張した毛細血管、小静脈内に顆粒球が出現し、内皮細胞と接着している所見を認め、ドナーの好中球による微小血管障害と考えられる。表皮細胞のアポトーシスはGVHDより少ない。なお、生着とは、好中球が3日間連続して500個/ μ l以上に増えることである。

「生着までの期間は骨髄移植で2~3週間、末梢血幹細胞移植では約2週間、臍帯血移植では約3~4週間で要するらしい。治療はGVHDと同様でステロイドを用いることになる」。

グリテールはフィラグリンの発現を増加させる

第49回神奈川皮膚免疫アレルギー懇話会から(平成30年7月19日)

OVOL1は上皮細胞の分化に重要な働きを有している転写因子であるが、グリテールは芳香族炭化水素受容体(AHR)の活性化を介してOVOL1、さらにフィラグリン(FLG)

の発現を増強する。また表皮細胞にIL-4を加えると核内へのOVOL1移行が減少し、それとともにFLGの発現が減少した。この現象に対して、グリテールによる刺激を行うと、核内のOVOL1の発現が増加し、それとともにFLGの発現も増加した。アトピー性皮膚炎の治療のターゲットになりうる分子機構である。

「以前にも聞いたことがあるが、油症の研究から発展した成果で非常に興味深い。グリテールは大豆由来だが、そのほかにもドクダミ、ウチワサボテン、アーティチョークも同様の働きがあるらしく、そういったそういった創薬が実現するかもしれない」。

古典型Kaposi肉腫の化学療法は?

日本皮膚科学会第880回東京地方会から(平成30年7月21日)

70歳代の男性。四肢、体幹に多発する紫紅色結節が10数年来あり、緩徐進行性。病理組織でHHV-8陽性、HIV陰性で古典型Kaposi肉腫と診断。治療としてエトポシド単独を用いて改善した。AIDS関連のKaposi肉腫ではドキソルビシンリポゾーム(ドキシル[®]注)が唯一の保険適用薬で、これが第一選択薬となる。パクリタキセルも用いられるが、両者とも古典型Kaposi肉腫への適用はない。

「保険診療内で稀少癌の治療を行うことの難しさを感じた。制度を改めるしかなさそうだ」。